

Best Practice 幻の都市計画

近代都市・東京の誕生をもたらしたエンタープライズ・アーキテクチャー。

松田ばこむ

一枚の地図がある。
明治時代に描かれた東京の都市計画図だ。ただ馴染みのある東京の市街図とは様子がずいぶん異なっている。

まず東京駅が見当たらない。
築地本願寺から「中央大通り」を北に向かうと、東西に走る鉄道の「中央駅」がある。現在のJR有楽町駅のあたりか。

中央駅の北には、巨大な円形広場が配置され、この公園に外接するかたちで大通りと鉄道が正三角形をなしている。鉄道を底辺に、「皇后大通り」が西側の斜辺を、東側の斜辺を「天皇大通り」を構成しているのである。

中央駅の北口に立ち、鉄路にそって東に進むとやがて天皇大通りに出る。左に曲がって大通りを北上していくと、道の反対側には劇場に続いて、東京府庁、裁判所、警視庁が並ぶ官庁街となっている。

警視庁のあたりで頭を左に巡らすと、大公園に外接する正三角形の頂点に記念碑が立っている。明治維新の顕彰碑だろうか？ 碑のさらに東側には煉瓦建ての鹿鳴館が見えたかもしれない。

記念碑を背にして北へ向かうと、「日本大通り」に入る。東側には広大な敷地がひろがっている。博覧会場

だ。内国勸業博覧会でも開催されているのであろうか。当時としては珍しいイルミネーションや、エレベーター、はてはウォーターシュートのアミューズメント施設など、押し寄せた観客たちは文明開化の先の未来に目をみはったことであろう。

「ベックマン案」と呼ばれるこの堂々たるプランは、北は皇居のほぼ半分、南は愛宕神社、東は築地本願寺、西は日枝神社に至る範囲に及んでいる。実現すれば、東京はパリやウィーンに並ぶ近代都市として生まれ変わったはずだ。

構想を立てたのは、ウィルヘルム・ベックマン。1886年のことである。

当時、不平等条約改正を目指していた明治政府は、なによりも近代国家としての体裁を整えることを急ぎ、いまなお江戸の名残りがあふ東京を「花の都パリ」のような壮麗な都市に改造しなくてはならないと考えた。

そこで新興国ドイツの高名な建築家であり、ベルリンで共同建築事務所を開いていたヘルマン・エンデとヴィルヘルム・ベックマンの二人を招聘し、都市計画案の策定を委嘱することにした。

1986年4月。来日したベックマンは、

二ヶ月間にわたって日本政府の意向を細かくヒアリングするとともに、現地の地形と景観を徹底的に見聞した。築地本願寺の大屋根や愛宕山などに上って描いたスケッチや、高さ15メートルもの櫓を組んで撮影した写真をもとに、放射状道路や広場・公園、記念碑などを伴った東京を構想したという。

6月には日本政府と正式契約を交わし、さらに国会議事堂や司法省、東大審院(後の最高裁判所)などの設計の依頼も受け、エンデと設計の詳細を詰めるために7月にはドイツに帰国した。

東京の地図をながめてみれば分かるように、ベックマンの構想が実現することはなかった。

1897年5月。エンデは都市計画の完成案と、国会議事堂、司法省、東京裁判所、警視庁、首相官邸、皇居の設計図を携えて来日したが、彼を待っていたのは、財政難を理由とする大幅な縮小計画であった。

計画縮小の本当の理由は、積極的に計画を進めていた臨時建設局の初代総裁・井上馨(外務大臣を兼任)の立場が、条約改正交渉の失敗で微妙になっていたからだという。事実、井上

は9月に失脚している。

結局、ベックマン案にもとづいて竣工した建物は司法省と大審院のみであった。それも大幅な修正が加えられて。

壮大な東京改造計画は、霧消霧散してしまっただけだろうか？

そうではない。

司法省の建設を監督したのは河合浩蔵、東大審院の建設を監督したのは妻木頼黄^{つまきよりなか}であった。彼らはともにベックマンがベルリン工科大学に派遣した留学生であり、エンデの下で西洋建築を学んできた。さらには大工、石工、左官などの二十人に及ぶ職人もドイツに留学させている。その一方で、ベックマンは、自らの構想の

実現には、日本製煉瓦の品質に問題があることも指摘し、煉瓦製造技師をドイツから呼び寄せ、埼玉県深谷市に煉瓦製造会社を設立したりした。わずか数ヶ月の滞在期間ながら、その間に東京改造に必要なインフラやリソースを整えていったのであった。明治中期から後期にかけて、官庁や銀行など煉瓦づくりの西洋建築が次々と建設されていったが、ベックマンのこうした取り組みがその土壌をつくり、やがて花開いたと考えることもできよう。

確かにベックマンとエンデの取り組みは、都市計画としては失敗だったのかもしれない。結果的に、東京という街は、パリのような都市計画を持たないまま自然膨張を続けていると揶揄されることさえある。

しかしながら、明治政府に対する

徹底したヒアリングから東京のあるべき姿を明確に描いたうえで、煉瓦やセメントといった材料を吟味し、建築技術者や職人をドイツから呼び寄せ、さらには製造工場さえ設立した。こうした全体的な観点からの取り組みが、日本の都市計画や建築文化に与えた影響は決して小さくはなかったはずだ。

東京駅の赤煉瓦駅舎の前に立ち、車の流れを見ながら「中央駅」から北へ延びる街並を想像してみる。ベックマン案の東京をこの目で見たかった気もするが、その一方で、今の東京もなかなか悪くないかなとも思う。

【参考文献】

藤森照信『明治の東京計画』岩波書店
石田頼房編『未完の東京計画』筑摩書房

ベックマン案は大幅に縮小・変更されてしまったが、近代都市・東京の原点となったことも確かである。